



玄関正面／地松と宮崎産のケヤキで構成された玄関廻り。建具にもアルミサッシなどは使わず、オリジナルで木枠を製作した。訪れた人誰もが自然の木目の美しさに感嘆するという。ここを基準に東側に座敷などの「プライベートスペース」と西側のリビングを中心とした「パブリックスペース」とに分かれている。正面のレリーフ調のシラス壁は建で押さえた形をそのまま残したものの、障子は八女の手漉き和紙。

「土地特性を知り、環境に逆らわず自然と共生することに重点を置いて設計しています。」そう話す網田さんの設計は、やはり機能美という言葉に集約されるだろう。この土地に何層も足を運び、風向き、陽当たり、周囲の環境などを見つめていくことで、自ずと設計の方針やアイデアが生れます。いわばその土地と語り合い、土地が望む住まいを形作っているようだ。「在米工法」その日本の風土に適合する合理性があります。特に広縁と庇は季節ごとの陽射しの量をうまく制御して、適切な暖かさや明るさを自然に取り込めるからです。

建てられるべき家は
その土地が教えてくれる。

依頼が多いというのも頷ける心地よさだ。また「街のために山を守り、山のために街を造るべき」と言う網田さんは地産地消の観点からも地場の木材を推奨する。山に手を入れるためにも消費すべき木材を消費することで、自然の循環をうまく機能させられるからだ。考えてみれば杉の育成期間と人の一生はほとんど同じ長さである。

施工例として撮影した中川邸にはそうした設計の基本が十二分に活かされている。設計にあたり施主「中川龍比湖さん」から出された注文は「環境と身体にやさしい家」という一点のみだった。網田さんの設計思想に共感したからその大きな信頼だが、なるほど中川邸を満ちた空気は穏やかでやさしい。日田杉を中心とした九州産の木材、壁紙、構成されておき、そこで暮らす人と同じ呼吸を覚えているかのように、時間が経つにつれ、気持ちと身体がくろくき始めるのがわかる。網田さんには保育園や病院など公共施設からの



玄関奥からテラス側を望む／玄関に薪ストーブを置き、あっと驚くレイアウト。



座敷から玄関を望む／玄関スペースと一体感のある座敷がリビングフリーで続く。障子を開放すると、限のない開放感に満たされる。

「空気をデザインする」。 自然の木材がつくる 快適空間

取材・文＝天野真由美
撮影＝西田佳世

「近くの山の木」が、
その土地にとつての最高の建材。

「身土不」身体と土とは一つであり、四里四方で育つたものを食べるのが身体に良いという考え方はどうやら住まいにもあてはまるらしい。「無垢の木材と白壁の組み合わせがいちばん美しい」と言う建築家網田久さんは建設地が持つ山系、水系を含めた自然環境を設計の原点としている。「最高級とされる材木やゴーストメッドのある外国材よりも、山の木、近くの山の木で建てた家がいちばん良い住まいだ」と思っています。異なる気候や風土で育った木材は気温や湿度に適応しづらく、良くない伸縮やソリを起こすこともありますが、つまりその土地の近くで育った木材こそ、その家にとって最高の建材であるということだ。

施工例として撮影した中川邸にはそうした設計の基本が十二分に活かされている。設計にあたり施主「中川龍比湖さん」から出された注文は「環境と身体にやさしい家」という一点のみだった。網田さんの設計思想に共感したからその大きな信頼だが、なるほど中川邸を満ちた空気は穏やかでやさしい。日田杉を中心とした九州産の木材、壁紙、構成されておき、そこで暮らす人と同じ呼吸を覚えているかのように、時間が経つにつれ、気持ちと身体がくろくき始めるのがわかる。網田さんには保育園や病院など公共施設からの



玄関正面／地松と宮崎産のケヤキで構成された玄関廻り。建具にもアルミサッシなどは使わず、オリジナルで木枠を製作した。訪れた人誰もが自然の木目の美しさに感嘆するという。ここを基準に東側に座敷などの「プライベートスペース」と西側のリビングを中心とした「パブリックスペース」とに分かれている。正面のレリーフ調のシラス壁は建で押さえた形をそのまま残したものの、障子は八女の手漉き和紙。

「土地特性を知り、環境に逆らわず自然と共生することに重点を置いて設計しています。」そう話す網田さんの設計は、やはり機能美という言葉に集約されるだろう。この土地に何層も足を運び、風向き、陽当たり、周囲の環境などを見つめていくことで、自ずと設計の方針やアイデアが生れます。いわばその土地と語り合い、土地が望む住まいを形作っているようだ。「在米工法」その日本の風土に適合する合理性があります。特に広縁と庇は季節ごとの陽射しの量をうまく制御して、適切な暖かさや明るさを自然に取り込めるからです。

建てられるべき家は
その土地が教えてくれる。

依頼が多いというのも頷ける心地よさだ。また「街のために山を守り、山のために街を造るべき」と言う網田さんは地産地消の観点からも地場の木材を推奨する。山に手を入れるためにも消費すべき木材を消費することで、自然の循環をうまく機能させられるからだ。考えてみれば杉の育成期間と人の一生はほとんど同じ長さである。

施工例として撮影した中川邸にはそうした設計の基本が十二分に活かされている。設計にあたり施主「中川龍比湖さん」から出された注文は「環境と身体にやさしい家」という一点のみだった。網田さんの設計思想に共感したからその大きな信頼だが、なるほど中川邸を満ちた空気は穏やかでやさしい。日田杉を中心とした九州産の木材、壁紙、構成されておき、そこで暮らす人と同じ呼吸を覚えているかのように、時間が経つにつれ、気持ちと身体がくろくき始めるのがわかる。網田さんには保育園や病院など公共施設からの



玄関奥からテラス側を望む／玄関に薪ストーブを置き、あっと驚くレイアウト。



座敷から玄関を望む／玄関スペースと一体感のある座敷がリビングフリーで続く。障子を開放すると、限のない開放感に満たされる。

「空気をデザインする」。 自然の木材がつくる 快適空間

取材・文＝天野真由美
撮影＝西田佳世

「近くの山の木」が、
その土地にとつての最高の建材。

「身土不」身体と土とは一つであり、四里四方で育つたものを食べるのが身体に良いという考え方はどうやら住まいにもあてはまるらしい。「無垢の木材と白壁の組み合わせがいちばん美しい」と言う建築家網田久さんは建設地が持つ山系、水系を含めた自然環境を設計の原点としている。「最高級とされる材木やゴーストメッドのある外国材よりも、山の木、近くの山の木で建てた家がいちばん良い住まいだ」と思っています。異なる気候や風土で育った木材は気温や湿度に適応しづらく、良くない伸縮やソリを起こすこともありますが、つまりその土地の近くで育った木材こそ、その家にとって最高の建材であるということだ。